

表1 地域活性化に役立つ近代産業遺産33の物語

| 33近代化産業遺産群に係るストーリー及び構成遺産 |   |
|--------------------------|---|
| 番号                       | タイトル  |
| 1                        | 「近代技術導入事始め」海防を目的とした近代黎明期の技術導入の歩みを物語る近代化産業遺産群    |
| 2                        | 欧米諸国に比肩する近代造船業成長の歩みを物語る近代化産業遺産群                 |
| 3                        | 鉄鋼の国産化に向けた近代製鉄業発展の歩みを物語る近代化産業遺産群                |
| 4                        | 建造物の近代化に貢献した赤煉瓦生産などの歩みを物語る近代化産業遺産群              |
| 5                        | 外貨獲得と近代日本の国際化に貢献した観光産業草創期の歩みを物語る近代化産業遺産群        |
| 6                        | 我が国の近代化を支えた北海道産炭地域の歩みを物語る近代化産業遺産群               |
| 7                        | 北海道における近代農業、食品加工業などの発展の歩みを物語る近代化産業遺産群           |
| 8                        | 洋紙の国内自給を目指し北海道へと展開した製紙業の歩みを物語る近代化産業遺産群          |
| 9                        | 有数の金属供給源として近代化に貢献した東北地方の鉱業の歩みを物語る近代化産業遺産群       |
| 10                       | 京浜工業地帯の重工業化と地域の経済発展を支えた常磐地域の鉱工業の歩みを物語る近代化産業遺産群  |
| 11                       | 新潟など関東甲信越地域で始まった我が国近代石油産業の歩みを物語る近代化産業遺産群        |
| 12                       | 銅輸出などによる近代化への貢献と公害対策への取組みに見る足尾銅山の歩みを物語る近代化産業遺産群 |
| 13                       | 「上州から信州そして全国へ」近代製糸業発展の歩みを物語る富岡製糸場などの近代化産業遺産群    |
| 14                       | 「貿易立国の原点」横浜港発展の歩みを物語る近代化産業遺産群                   |
| 15                       | 優れた生産体制等により支えられる両毛地域の絹織物業の歩みを物語る近代化産業遺産群        |
| 16                       | 激しい産地間競争等を通じ近代産業へと発展した利根川流域等の醸造業の歩みを物語る近代化産業遺産群 |
| 17                       | 「重工業化のフロントランナー」京浜工業地帯発展の歩みを物語る近代化産業遺産群          |
| 18                       | 官民の努力により結実した関東甲信越地域などにおけるワイン製造業の歩みを物語る近代化産業遺産群  |
| 19                       | 近代技術による増産を達成し我が国近代化に貢献した佐渡、鯛生両鉱山の歩みを物語る近代化産業遺産群 |
| 20                       | 近畿の経済や中部のモノづくりを支えた中部山岳地域の電源開発の歩みを物語る近代化産業遺産群    |
| 21                       | 我が国モノづくりの中核を担い続ける中部地域の繊維工業・機械工業の歩みを物語る近代化産業遺産群  |
| 22                       | 「羽二重から人絹へ」新たなニーズに挑み続けた福井県などの織物業の歩みを物語る近代化産業遺産群  |
| 23                       | 輸出製品開発や国内需要拡大による中部、近畿、山陰の窯業近代化の歩みを物語る近代化産業遺産群   |
| 24                       | 京都における産業の近代化の歩みを物語る琵琶湖疎水などの近代化産業遺産群             |
| 25                       | 我が国鉱業近代化のモデルとなった生野鉱山などにおける鉱業の歩みを物語る近代化産業遺産群     |
| 26                       | 「軽工業から重工業へ・河岸部から臨海部へ」阪神工業地帯発展の歩みを物語る近代化産業遺産群    |
| 27                       | 商業貿易港として発展し続ける神戸港の歩みを物語る近代化産業遺産群                |
| 28                       | 日本酒製造業の近代化を牽引した灘・伏見等の醸造業の歩みを物語る近代化産業遺産群         |
| 29                       | 「東洋のマンチェスター」大阪と西日本各地における綿産業発展の歩みを物語る近代化産業遺産群    |
| 30                       | 地域と様々な関わりを持ちながら我が国の銅生産を支えた瀬戸内の銅山の歩みを物語る近代化産業遺産群 |
| 31                       | 産炭地域の特性に応じた近代技術の導入など九州・山口の石炭産業発展の歩みを物語る近代化産業遺産群 |
| 32                       | 九州南部における産業創出とこれを支えた電源開発・物資輸送の歩みを物語る近代化産業遺産群     |
| 33                       | 近代の沖縄経済に貢献した「2つの黒いダイヤ」製糖、石炭両産業の歩みを物語る近代化産業遺産群   |

出典：「経済産業省資料」

# 西村幸夫



経済産業省による近代化産業遺産の認定

二〇〇七年一月三〇日、横浜の新港埠頭の再生された赤煉瓦倉庫で近代化産業遺産群の認定式が開催された。認定証と認定のプレートは甘利明経済産業大臣からじきじきに授与された。全国各地から自治体の首長やメーカーの社長や工場長が多数出席し、華々しい認定証交付式になった。

今回、初の試みとして認定されたのは三三の近代化産業遺産群をめぐる物語である。その一覧を表一に示す。これは日本が独立国として産業構造の発展、地域の自立のために様々な試みを続けてきたことの意義を全国的な視点で評価しようとする試みの代表例としてのちに記憶されるだろう。

この試みのユニークな点は、近代化をささえた日本の産業

## 「近代化産業遺産にみる新しい文化遺産の発想」

遺産を個別単体ではなく、先人たちの努力の物語であること

らえ、物語群を選んでいく点である。たとえば、「我が国の近代化を支えた北海道産炭地域の歩みを物語る近代化産業遺産群」、「激しい産地間競争等を通じ近代産業へと発展した利根川流域等の醸造業の歩みを物語る近代化産業遺産群」さらには、「羽二重から人絹へ」新たなニーズに挑み続けた福井県などの織物業の歩みを物語る近代化産業遺産群」などのように、対象となる産業や地域にスポットライトがあてられ、先人たちの努力の跡が語られているのである。

また、近代化草創期の四つの物語、すなわち「近代技術導入事始め」海防を目的とした近代黎明期の技術導入の歩みを物語る近代化産業遺産群、「欧米諸国に比肩する近代造船業成長の歩みを物語る近代化産業遺産群」、「鉄鋼の国産化へ向けた近代製鉄業発展の歩みを物語る近代化産業遺産群」そし

て「建造物の近代化に貢献した赤煉瓦生産などの歩みを物語る近代化産業遺産群」は全国に広がる近代化の努力の足跡を示すものであり、技術史上においても貴重な遺産である。

挙げられた構成資産は必ずしも文化的な価値を有するものでなくともよい。たとえのちに改造や変更があっても物語の重要性には変わりないからである。また、不動産だけでなく、「京都における産業の近代化の歩みを物語る琵琶湖疎水などの近代化産業遺産群」を例にとると、琵琶湖疎水の水車（琵琶湖疎水記念館所蔵）や疎水を用いた発電によって生まれた紡績工場の中に据えられた木製のジャガード機（西陣織会館内所蔵）などのような機器類も含まれているのである。

これら単体の構成資産は合計五七五件に達している。その主なものには「近代化産業遺産 平成一九年度 経済産業省」とかかれたスチール製の立派なプレートが贈られた。今後これらのプレートが外から見るとどこに据え付けられることになった折りには、これらプレート板をあたかも巡礼のようにめぐる産業観光の個人客も見られるようになるかもしれない。

なお、ここでいう近代化産業遺産とは、経済産業省の作成した文書によると、幕末から戦前までの産業遺産で、建造物はもとより、画期的な製造品及び当該製造品の製造に用いられた設備機器、これらの課程を物語る文書など、産業近代化に関係する多様な物件が対象とされ、これらの復元物や模型も対象としている。また、近世以来の伝統的な産業を直接対象とするのではなく、近代化のなかで発達してきた産業遺産に限り、さらにその産業の発展過程においてイノベーター的な役割を果たしてきた産業遺産を対象としている。

私自身、三三の物語を選定する産業遺産活用委員会の座長をつとめたので、具体的な議論の身身はよく承知しているが、当初は日本の産業近代化の全貌がそれほど簡単に把握できるのかといった疑念が委員の間にただよっている感もなくはない。



赤煉瓦の閘門橋（葛飾区）

かったが、次第に物語の拡がりとおもしろさに委員のメンバーが強動かされるようなムードとなり、最後は「よくやった」といった充実感が委員会の雰囲気支配していた。近代化に寄与した人々の物語に思いをはせる。

近代の産業遺産については、これまで文化庁によって一九九〇年度より「近代化遺産（建造物等）」という名称で総合的な調査が県別に始められ、次第にその内容が明らかになりつつあるが、まだまだ悉皆調査としては道半ばであり、そのうえ建造物等に限定されているために挙げた機械類やそのマニュアルなどにまでは届いていないというのが現状である。また、文化財指定が最終目標としてあるため、文化財保護的な価値判断から自由になり難いという限界があった。それはそれで重要なことではあるが、地域の活性化という面からするともう少し柔軟な対応も考えられるだろう。今回の経済産業省による認定は地域の活性化が主眼であるため、より柔軟に産業遺産を取り扱うことができることとなった。

それにしても従来、産業遺産という古い機械類を納める巨大な建造物といった印象が強く、見た目も油とほりにまみれているようで、他の文化遺産のようなスポットライトが当たりにくかった。

しかし、これを単体としてとらえるのではなく、物語を支える構成要素ととらえ直してみると、かつての技術者たちの汗と涙の結晶のひとつひとつの要素と思えるようになり、そこでドラマに思いをはせることも可能になる。

考えてみると、日本は世界の中では工業国と見られているのであるから、こうした産業遺産は世界にもアピールする日本の独自の遺産であるともいえるのだ。さらにいうと、日本は非西洋世界で初めて近代化を成し遂げた国であり、その近代化もたんなる西欧の移植ではなく、日本の風土や伝統に合致した改善を日本人の手によって施された工夫のたまものとしての近代化であった。したがって、こうした日本の近代化

れている。

第一に、「近代技術導入の始まり」海防を目的とした近代黎明期の技術導入の歩みを物語る近代化産業遺産群として、鉄の船を造る技術を獲得するための努力の成果のうち、水戸藩による事業の関連遺産として石川島資料館（中央区）の石川島造船所に関する展示（旭日丸模型など）、幕末の造船関連遺産として船の科学館（品川区）所蔵の幕末船舶の模型。

第二に、建造物の近代化に貢献した赤煉瓦生産などの歩みを物語る近代化産業遺産群として、赤煉瓦の東京駅（千代田区）と同じく赤煉瓦の閘門橋（葛飾区）。

第三に、洋紙の国内自給を目指し北海道へと展開した製紙業の歩みを物語る近代化産業遺産群として、北区にある渋沢史料館（晩香廬、青淵文庫）、紙の博物館の所蔵物、国立印刷局王子工場、同滝野川工場、東書文庫。

第四に、優れた生産体制等により支えられる両毛地域の絹織物の歩みを物語る近代化産業遺産群として、国立科学博物館（台東区）にある鉄製ジャガード機。

こうして並べて見ると、これまであまり文化遺産という目では見てこなかった資産ばかりがあげられているようだ。新しい発見があるのではないだろうか。

また、今回の経済産業省のリストは完全な物ではないという点がある。たとえば、橋梁や鉄道、運河などの運輸交通関係の産業遺産が抜けている。これはこうした類型の遺産が全国各地に所在することから、今年一年では整理がつかなくかつたからである。これらの分野の遺産に関しては来年度に引き続

の足跡を明らかにすることは非西洋世界全体にとっても貴重な経験を明らかにすることだといえる。

それがとりたてて特別な文化の香り高い観光地にあるわけではなく、われわれの身近な工場地帯や臨海部に存在しているものである。身の回りの環境を見る目も変わってくるというものである。

おもしろいことに経済産業省が今回作成した「近代化産業遺産群二三」と銘打った一連の冊子には「近代化産業遺産群」の英訳として「Heritage Constellations of Industrial Modernization」が使われている。「Constellations」は耳慣れない単語であるが、辞書を引くとこの言葉には「群」という意味もあるが、筆頭の訳語は「星座」である。

なるほど、考えてみると星座もたんに星の集合を漫然と見ているだけでは意味のある集まりには見えてこないが、その後には神話という物語があると思えば、偶然に見え星の配置に意味が見えてくるものである。各地に散らばる産業遺産もそれだけではたんなる無用の長物か極端な場合には産業廃棄物のように見えることもあるだろう。しかし、その背後に人の思いのこもった物語を見いだすと、俄然意味のあるまとまりと見えてくるのである。ひとつの物語が一見無秩序に配置された星々を「星座」に仕立て上げるのだ。これは言ってみれば、点から線そして面へと手間をかけるのとは別の、点をそのままネットワークさせるといった意味での「星座方式」のまちづくりだと言ったこともできようである。

東京ではどのような近代化産業遺産が認定されたのか。では、今回経済産業省に認定された近代化産業遺産群のなかに東京都内の遺産はどのようなものがあるのだろうか。あいに都内の自治体や事業所は今回の近代化産業遺産の動きにそれほど敏感であったようには見えないので、日本の近代化の配電盤を果たした首都としては、今回認定された資産の数は残念ながら多くない。しかし、次のようなものがあげら

き認定が行われる予定である。東京には隅田川にかかる震災復興橋梁をはじめとして旧国鉄の高架施設や品川運河沿いの倉庫群など、今回のリストアップからは漏れている分野の遺産が数多く存在するといえる。このほか戦争遺産や軍事関連遺産なども今回のリストに収録することが見送られている。

さらに、近代以前からの伝統産業に由来する遺産や逆に戦後に興隆した産業の遺産などにまで対象を拡げると、東京の産業遺産の幅と奥行きは一挙にひろがるだろう。

加えて、こうした産業の近代化に寄与した実業家や技術者の住まいや活動の場などの事績にまで目を配ると、東京の至るところが近代化産業遺産群の構成資産ということになる。さらに目を拡げると

本稿の目的は近代化産業遺産群二三の物語という経済産業省の企画の宣伝にあるわけではない。このような見方をすることによって、身の回りのごく当たり前に思えた環境がじつは重要な文化の資産であるということがあり得るのだということを示したいというのが目的である。そしてこうしたものの見方によって埋もれていた宝を磨き出すということは何も産業遺産に限らず、より一般的な地域史のなかでも可能である。一般論として、歴史をひもとけばどのような地域にも未だ磨かれていない宝が隠されているものなのだ。なぜなら、地域とは本来そのようなものなのであるから。こうした作業は必ずや地域の活力につながっていくだろう。

ましてや江戸の時代から国の中心であったこの地である。歴史の中に多様な宝が埋まっていなくてもいい。問題はどのような柔軟な発想をもてるかどうかという点だけである。

西村 幸夫（にしむら ゆきお）プロフィール

1952年、福岡市生まれ。東京大学都市工学科卒、同大学院修了。明治大学助手、東京大学助教授を経て、1996年より東京大学教授。専門は都市計画、都市保全計画、市民生活のまちづくり論など。工学博士。主な著書に「都市保全計画」（東大出版会、平成16年）、「環境保全と景観創造」（鹿島出版会、平成9年）など。